第10回（創立30周年記念）演奏会に向けて　その２

神谷

普段の限られた時間での練習では、曲想や目指すところなどについて十分にお伝えすることができていないため、なるべく団員の皆さんに気持ちをそろえていただきたく、ちょっと書いてみることにします。

昨年暮れのプリントにも書きましたが、第１ステージ「故郷」は、Ｂ．チルコットの編曲の特徴的なサウンド～特に半音や二度音程であたるところ～が聴きどころなのですが、もう少し聴き込んでいくと、実はそうした斬新なアレンジに対して、いかに日本の古くから歌い継がれてきた唱歌たちが耐えうるものであるかに思い至ります。斬新な編曲で酔わせるのではなく、むしろそうした奇抜なアレンジに振り回されない、日本の唱歌の持つ揺るぎない安定感・安らぎ、一人の西洋人のフィルターを通した日本音楽の良さをも表出できたらよいと思うようになりました。

「初心のうた」は、再び戦争をしないという終戦時の誓い（初心）を再認識しようと訴えている内容だと思います。戦後７１年目を迎えた今年、周辺各国やテロなどで世界情勢も緊迫しつつあるなか、改めて平和を願い、表現することの大切さを感じています。個人的な話で恐縮ですが、私の父は４人兄弟の末っ子で、長兄を戦争で失いました。南方での戦死だそうです。父方の祖父は中日歌人会に所属しており、昭和５０年６月発行の歌集『鴨』には、次のような歌が載っています；

青春を空しく御国に捧げたる吾子のうつしゑ色褪せもせず　(S48)
戦死せる吾子の日誌に節子と云ふ恋人ありと後にて知れり　(S40)
節子と云ふ恋人ありし愛し子は戦に散り夢と消え行く　(〃)
うら若く戦さの華と散りし子の二十年経ても面影消えず　(〃)
亡き吾子の霊安かれと慰霊碑に香華供えて暫時額づく　(〃)
未曽有と云ふ戦の苦に堪え忍び八十路の坂を登る卯の春　(S50)

祖父から直接話を聞いたことはありませんが、我が子の戦死を悼む歌が数多くあり、さぞ無念だったのだろうと思います。私の父も豊川で敵機の襲撃に遭い、九死に一生を得ました。受け継がれた命に感謝しつつ、平和な未来に向かって「引き金引けなくなる」ような歌を紡ぎ出していかなければならない、そう感じています。

Ⅰ　初心のうた

世の中の闇を表す不気味なピアノ前奏で始まるが、ほし（希望）を見上げて過去に混乱を招いた原因を「つきとめ」、「ゆめをうごかすはぐるま」を「まきなおそう」と前向きに気持ちが高まる。アジア諸国という「かがみ」に自国を映して、未来のあるべき姿を「つきとめよう」と結ぶ。

Ⅳ　でなおすうた

以前取り上げた「旅のかなたに」で「足」が全曲の重心だったように、「初心のうた」においては「Ⅳ　でなおすうた」が大きなウェイトを占めています。最後の「はずだった」がポイントです。冬から春へ、セピア色の茶色い時代（中原中也ではありませんが）から平和で色鮮やかな時代へと無事に帰還した「はずだった」とは、そうではなくなる危惧を背後に秘めていますね。

Ⅴ　泉のうた

「おどれる　広い道」とは皆が自由で平和に暮らせる世の中のこと。それは「ひとり　歩ける足」が「つくりだす」もの。たったひとりの足跡が大勢による轍となり、いつしか「広い道」が形成されていく。２～４行目の「ひとり」の文字配置がそれを物語る。「あるといいな」の最後の「な」は、やや子供っぽい、夢を見ているような表現だが、その分純粋さを感じ取ることができる